

京都大学	博士（文学）	氏名	木村整民
論文題目	トリラトナダーサの經典解釈		
（論文内容の要旨） 本論文は、トリラトナダーサ（Triratnadāsa, ca. 5–7c）著『般若波羅蜜多円集要義釈論』（Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgrahakārikāvivarāṇa, 以下『円集要義釈』）を主要文献とし、トリラトナダーサによる般若経解釈の意義、独自性、思想史的発展を明らかにしたものである。 多数の大乗仏教經典の中でも、知恵の完成（prajñāpāramitā）等を説く般若経は重要な位置づけにある。複数の般若經典が登場するなか、八千頌の詩節の長さを持つとされる『八千頌般若経』（Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā）は、初期に成立したとされる。この『八千頌般若経』には複数の注釈書が存在するが、「知恵の完成の要約」と題する『般若波羅蜜多円集要義』（Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha, 以下、『円集要義』）は、現存最古の注釈書である。その著者ディグナーガ（Dignāga, 470-530/480-540）は、仏教論理学や認識論の大成者として大変重要な瑜伽行唯識派の学僧である。 ディグナーガ著『円集要義』は、般若経の内容を、空、散乱の否定、三性説の観点から整理している。空とは事物の非実体性であり、散乱とは修行の妨げとなる心の乱れのことであり、三性説とは現象世界を三つの側面から説き示す説のことであり、いずれも仏教における重要思想といえる。 この『円集要義』に対しては、トリラトナダーサが著した『円集要義釈』なる注釈書が存在し、前者の内容理解の助けになる。但し、一部にディグナーガの説明には見られないトリラトナダーサ独自ともいえる解釈が出てくるため、扱いには注意が必要である。 なお、インドの伝記においては、トリラトナダーサはディグナーガと同期であり、互いの文献を注釈し合ったと述べられていることから、伝統的にはこの『円集要義釈』が学術的価値は極めて高いものと考えられてきたが、近代仏教学において網羅的研究は行われていない。 本論文では、副論文に『円集要義釈』のチベット語訳と漢訳の批判的校訂テキストならびに現代語訳を付し、主論文で、同注釈書の全体的構成を詳細に論じている。瑜伽行唯識学派の複数の重要文献を比較参照しつつ、ディグナーガ、トリラトナダーサへと、般若経理解の思想的発展をとらえなおし、その上で、トリラトナダーサの思想的特徴を浮き彫りにすることを主たる目的としている。 本論文は、以下の4つの章を柱とする。 第1章：トリラトナダーサと『円集要義釈』 第2章：十六空 第3章：十種散乱 第4章：三性説 第1章では、本論文の考察対象であるトリラトナダーサの年代と著作についての基本情報を整理している。第1節では、トリラトナダーサについて、伝記とその問題点に触れ、年代論を考察し、トリラトナダーサ二人説の可能性について新たに提起している。第2節では、トリラトナダーサ著『円集要義釈』の書誌情報を詳細に整理している。第3節では、トリラトナダーサの解釈を通してディグナーガ著『円集要義』の構成を確認し、そこに見られるディグナーガの特徴と、後世に与えた影響について概説している。インドのみならずチベットにおいても、ディグナーガ著『円集要義』が瑜伽行唯識派における般若経解釈の重要な著作と見做されていた事実を裏付ける文献的証拠を提示している。			

第2章では、經典理解の中心となる空性について検討している。論者は、般若経には、計二十種類の空を認める系統と、計二十二種類の空を認める系統があると区分けた上で、それを基準に、經典、中觀派、瑜伽行唯識派と順に検討する。そして、瑜伽行唯識派の中でも、トリラトナダーサの理解の特徴を明らかにする。

第1節から第3節において、論者の設定した、計二十種類の空を認める系統と、計二十二種類の空を認める系統とに沿って、空の分類史を整理している。第4節では、トリラトナダーサが属する瑜伽行唯識派の十六空について検討している。瑜伽行唯識派の十六空は、各項目の名称こそ二十空の系統に類似するものの、構成や内容については独自の発展を見せたものと論じている。本節では、『中辺分別論』の理解、それと『円集要義』の相違、更に、これら両書の思想を承けたトリラトナダーサの理解を整理している。

第3章では、ディグナーガ以前の瑜伽行唯識派が説く十種散乱を概観し、『円集要義』とそれらの関係性を明らかにした上で、トリラトナダーサの理解と特徴を考察している。特に、トリラトナダーサの十種散乱が『摂大乘論』に依拠しており、推論式と自己認識論を導入したことで思想的に発展させたことを指摘している。

十種散乱は、『大乘莊嚴經論』、『大乘阿毘達磨集論』、『摂大乘論』などに説かれているが、トリラトナダーサが、十種散乱を、般若経や無分別知と関連付けて説く点で、とりわけ『摂大乘論』に準拠していることを本論文は示した。

『円集要義』は、十種散乱の中でも、無いものを有ると誤解する「有相散乱」と、有るものを無いと誤解する「損減散乱」の説明の後に、両散乱と関連付けて三性説を解説する。また、『摂大乘論』が説く散乱と、『中辺分別論』が説く空性の内容とが、思想的に共通する点に着目し、『円集要義』が引用する十六空と十種散乱の経文が、順序、内容ともに共通することを新たに指摘している。

論者は、十種散乱の第五散乱・第六散乱を十種の中心とし、そこに推論式と自己認識論を導入する点を、トリラトナダーサの大きな特徴だとしている。十種の散乱の中心を定めることは、ディグナーガの『円集要義』には見られない試みであり、さらに、そこにディグナーガの晩年に確立したとされる自己認識論と、ダルマキールティ（600-660）以降の推論式を採用している。このように、ディグナーガの初期に成立したとされる『円集要義』に、ディグナーガ晩年以降の思想を付加している点で、トリラトナダーサに思想的発展がみられる。さらに、推論式において注目すべき点は、無二知が自己認識であることと、それが実在することを論証することである。ここでも「無二知」を軸に置くトリラトナダーサの經典理解に対する一貫した姿勢が見られる。

第4章では、トリラトナダーサ以前の三性説を整理した上で、トリラトナダーサの三性説理解とその特徴を考察する。本章では、ディグナーガおよびトリラトナダーサの三性説理解は、円成実性を基軸とするものであると述べる先行研究に対して、トリラトナダーサの理解は従来の解釈と異ならないことから依他起性を基軸としたものであり、且つ、三性説理解の上で「無二知」の実在を強調していると表現しなおした。なお、トリラトナダーサは、上述の十種散乱のうち、有相散乱の解消のために、遍計所執性に重点を置いて解説する。また、損減散乱の解消のために、依他起性と円成実性に重点をおいて解説する。そのうち、有相散乱の解消に際しても、「無二知」だけは否定せずその実在を認める点を、トリラトナダーサの特徴として指摘している。

(論文審査の結果の要旨)

本博士論文は、既存のトリラトナダーサ研究が部分的な分析にとどまっていたのに対して、『円集要義釈』を全訳した上で、トリラトナダーサの年代論、さらに、般若經理解の構造全体を整理し論じている点に特徴がある。特に、空性の分類、十種散乱、三性説に関しては、トリラトナダーサ以前の主要文献の説と比較考察を行い、トリラトナダーサの特徴を明らかにしている。これまで全容が不明であったトリラトナダーサの思想と特徴を総合的に論じた点に、本研究の学術的独創性と意義がある。また、『円集要義釈』全文のチベット文および漢文の批判的校訂テキスト、並びに、現代語訳は存在していないが、それらを副論文として提出したことも、トリラトナダーサ研究を加速させる点で、学術的意義が認められる。

第1章においては、本論文の考察対象であるトリラトナダーサの年代と著作についての基本情報を整理している。第1節では、トリラトナダーサの伝記とその問題点に触れ、彼の年代論を再考し、ディグナーガと同時代である可能性と、ダルマキールティ以後の時代である可能性に加え、トリラトナダーサ二人説についても第3の可能性として新たに提起している。論者は、いずれの年代が正しいか結論づけることはしていないが、年代論争に新たな可能性を追加提示した点は価値がある。

第2章では、經典理解の中心となる空性について検討している。第1節から第3節において、論者は、計二十種類の空を認める系統と、計二十二種類の空を認める系統の二系統があるとし、両系統に沿って空性分類史を整理している。第4節では、トリラトナダーサが属する瑜伽行唯識派の十六空について検討し、瑜伽行唯識派の十六空は、各項目の名称こそ二十空の系統に類似するものの、構成や内容については独自の発展を見せたものと論じている。

空性分類史を、中観派から瑜伽行唯識派に至るまで、時代を追って詳細に整理した研究としては、本論文が初めての試みといえる。特に、『円集要義』の空性に関する引用文が『八千頌般若經』に準じていること、トリラトナダーサの十六空の解説内容が『中辺分別論』に準拠している点を具体的に明らかにしたことは評価に値する。

第3章では、ディグナーガ以前の瑜伽行唯識派が説く十種散乱を概観し、『円集要義』とそれらの関係性を明らかにした上で、トリラトナダーサの理解と特徴を考察している。

まず、『円集要義』においてディグナーガは、十種散乱の中でも、無いものを有ると誤解する「有相散乱」、及び、有るものを無いと誤解する「損減散乱」の説明の後に、これら2つの散乱と関連づけて三性説を解説している。これに対して、トリラトナダーサは、十種散乱のうち、5番目の一性散乱と6番目の異性散乱を最重要視し、それらの議論に推論式と自己認識論を導入する点で、特徴的であることを論者は指摘している。十種の散乱の中心を定めることは、『円集要義』に無い理解であり、さらに、そこにディグナーガの晩年に確立したとされる自己認識論と、ダルマキールティ（600–660）以降とされる推論式を採用している。このように、ディグナーガの初期に成立したとされる『円集要義』に、ディグナーガ晩年以降とされる思想を取り入れている点で、トリラトナダーサに思想的発展がみられる。さらに、推論式において注目すべき点は、無二知が自己認識であることと、それが実在することを論証する点である。ここでも「無二知」を軸に置くトリラトナダーサの經典理解に対する一貫した姿勢が見られる。なお、論者は、トリラトナダーサが十種散乱と般若經と無分別知との関係性を論じる構造が、『摂大乘論』と共通している点に言及しているが、これも重要な指摘といえる。

第4章では、トリラトナダーサ以前の三性説を整理した上で、トリラトナダーサの三性説理解とその特徴を整理している。

本章では、ディグナーガに従ったトリラトナダーサの三性説理解は、円成実性を

基軸とするものであると述べる先行研究に対して、トリラトナダーサの理解は従来の解釈と異なることから依他起性を基軸としたものであり、且つ、三性説理解の上で「無二知」の存在を強調していると表現しなおしている。

なお、トリラトナダーサは、上述の十種散乱のうち、無いものを有ると誤解する「有相散乱」を解消するために、三性説の中でも遍計所執性に重点を置いて解説する。また、有るものを無いと誤解する「損減散乱」を解消するために、依他起性と円成実性に重点を置いて解説する。ただし、有相散乱の解消に際しても、「無二知」の存在だけは否定しない点にトリラトナダーサの特徴がある。

以上のように、本論文は、従来の研究史を整理した上で、関係する文献を参照して新たな知見を付け加え、瑜伽行唯識派の般若経理解を踏まえてトリラトナダーサの般若経理解を整理し、その特徴を示した点で学術的意義がある。

トリラトナダーサの年代論に関して、従来の説に加えて、二人説の可能性について新たに言及した点は興味深い。また、ディグナーガの初期に成立したとされる『円集要義』の解釈に、ディグナーガ晩年以降の思想や、ダルマキールティの推論式が取り入れられていることに着目し、トリラトナダーサの思想的発展性を論じた点も意義がある。十種散乱においては、「存在」という概念が否定対象となるにも関わらず、一貫して、無二知だけは存在として肯定する点は、トリラトナダーサの重要な特徴である。それらを整理し指摘した本論文は、一定の学術的価値を有する。

しかし、本論文にも不備な点がないわけではない。先行研究への参照や理解が不十分な点があり、本論において提示した原典の日本語訳の一部に誤りが確認された。また、副論文においては、批判的校訂テキストや日本語訳に誤りが確認されるため、それらの修正は必須といえる。しかしながら、これらの諸点は本論文自体の価値を著しく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和6年9月25日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。